

講演

なぜ、ドルゴルーキーなのか

ドストエフスキー『未成年』における危機の想像力

亀山 郁夫

はじめに

『未成年』はドストエフスキーの後期五大長編小説のなかでもっとも読まれることの少ない作品です。私自身、なんどもトライしながら、途中で挫折してきた経験があります。そればかりか、一般的には評価自体も定まっていないというのが実情であり、おおかた「失敗作」と見るのが定説のようです。

そうはいえ、『未成年』には、他の四大長編にはない独自の魅力が隠されていることも確かです。何といても、「心理小説」としての出来栄えは、抜群です。登場人物たちの運命を決する一通の手紙をめぐるドラマは、見方によっては、クンデラの『別れのワルツ』をも想起させる、大真面目なスラップスティックといった趣がありますが、ラスト近く、アンドレイ・ヴェルシーロフとカテリーナ・アフマーコワの二人の間でかわされる愛の「告白」の場面は、並の恋愛小説ではとうてい経験できない心理的な深さに達しています。たとえ、一般には「失敗作」と見られようと、これほどにも巧緻をきわめた物語を紡ぎあげることのできるドストエフスキーの力量は、やはり侮れません。

今回、『未成年』を翻訳し終えた印象は、十年前の再読の時期とほとんど

はじめに

- 1 『未成年』まで
- 2 境界線上に立つ『未成年』
- 3 「偶然の家族」――生き急ぐ子どもたち
- 4 一人称の問題――「失敗」か、成功か
- 5 歴史層から『未成年』を読む
おわりに





ど変わることはありませんでした。ひと言で言って、圧倒的な「流動性」の感覚です。この印象は、物語のすべての事件が、すばらしく鋭敏な目と耳の持ち主である主人公アルカージの意識を介して語られるという方法論それ自体に根差しています。小説では、主人公アルカージー・ドルブルーキーと父アンドレイ・ヴェルシーロフの二人の間の対立、葛藤と和解という物語を基本線に、いくつものサブプロットが絡みついていきますが、それらは互いに有機的な結びつきを持っており、総じて、破綻のない、精緻な長編小説に出来上がったといえるでしょう。

1 『未成年』の位置

さて、今、ドストエフスキーの『未成年』はどのような小説か、と問われたら、私は、「ロシア社会と人間の現実に対する危機感とその将来に向けた希望の書」と答えようと思います。むしろ、危機感の表明は、この小説が初めてではありません。厳密な見方をすれば、ロシア社会にたいする危機意識は、すでに彼が、ペトラシエフスキーサークルに関わった、はるか二十代にまで遡ります。彼がそこで求めた世界変革のモデルが、フリーエの「空想的社会主義」でした。

しかし、そのヴィジョンは、オムスク監獄、セミパラチンスクでの苦しい試練を経て、大きく変貌を強いられていきます。そしてその変貌は、同時代に生きる先鋭的な知識人の歩む道から大きく外れるものでした。とりわけ『地下室の手記』で表明された時代批判は、同時に二つの方向性を持っていたと考えることができます。すなわち、チエルヌイシエフスキーらのニヒリストが抱く功利主義にたいする対する批判、そして、急速な資本主義化の波に乗ってロシア社会の発展に貢献せんとする出世主義者たちへの批判です。

ロシア社会全体に対する、ほとんど憎悪にも似た心情は、『罪と罰』の

主人公ラスコーリニコフの哲学の中で絶望的なかたちで吐きだされました。主人公が殺害する金貸し老婆アリョーナ・イワノヴナは、まさに当時を風靡した拝金主義のシンボルの人物です。ラスコーリニコフの名前、父称、姓のもつている暗示的な意味合いについては、ベローフ（「ロマノフの祖国を断ち割る者」）や江川卓（「666」）の研究によって広く人口に膾炙していますが、その彼がひそかに掲げたナポレオン主義のヴィジョンが、ブルードンのアナキズムらの世界観を反映していたことも事実です。

ドストエフスキーがかりに、暴力的な形での世界変革のシンボルの行為としてラスコーリニコフの殺人を意味づけ、その不毛性をあからさまに示したとするなら、次作、『白痴』では、逆に、キリスト教的な愛、憐憫による人間の救済が、いかに非力であるかを見つけたのでした。「公爵キリスト」のイメージを投影した主人公ムイキン公爵の挫折は、「許し」の思想の挫折です。それは、けつして敗北ではなく、一つのケースに過ぎないとする見方もあるでしょう。しかし、ドストエフスキーはそう考えてはいなかったと思います。ムイキンは、いつさいの暴力や強制力を排除することで、世界の破局を救おうとしましたが、無力でした。一人の、盲目的欲望にかられた人間の嫉妬、ないし底深いニヒリズムの前に彼は、無力をさらけ出します。

『白痴』はまぎれもない悲劇であり、悲劇のパトス以外、何もかも伝えられていません。世界が孕む、あるいは一個の人間が潜在的に持ちうる暴力性は、ムイキンの憐憫をはるかにしのぐものがあるというのが、作者にとつての究極の認識だったと思います。そしてその暴力性は、同時に、死の絶対性という観念と深く通じていました。イッポリートの夢に現れる「毒虫」の存在、さらには、ロゴージン家の壁にかかるハンス・ホルバイン『墓の中の死せるキリスト』から立ち現れる圧倒的な死の威力、そして鹿革のナイフを手にしたロゴージンの盲目的な欲望。これらは、まさに三幅対となってドストエフスキーにおける「暴力性」のイメー



ジを構築しているのです。

顧みるに、ドストエフスキーは、一作ごとにジグザグな歩みを繰り返してきました。「白痴」に次ぐ『悪霊』では、当然のことながら、キリスト教的支配原理に対抗するニヒリストたちを登場させ、その破壊的な力学をつぶさに描きだしてみせます。圧倒的な暴力性の表象という意味において、『白痴』と『悪霊』はまさに双生児の関係にあるのです。

では、『未成年』では、何が「危機」として認識されたのでしょうか。『未成年』には、ひとりの青年を殺人へと突き動かす観念の憑依もなければ、崇高な悲劇性もなく、悪の限界を究めようとする人間精神の極限状況が描かれることはありません。笑いやグロテスクの要素も決定的に欠けています。しかも驚くべきことに、『未成年』をとらえている「観念」とは、「ロスチャイルドになる」という、常識的には考えがたい世俗的な野心です。もっともその野心は、ごく少額の具体的な資本が積みあがった時点で挫折してしまいます。蓄財の「観念」から解放された青年が向かった先は、蕩尽でした。総じて、『未成年』は、観念の重みから逃れた人々の物語なのです。

それでは、他の四大長編にはなく、『未成年』にあるものとは、何でしょうか。答えから先に述べれば、それこそは、ロシア社会全体の崩壊とその相似形としての家庭の崩壊のドラマです。あるいは、また、その逆の関係と呼ぶことができるかもしれません。

それまで、創作ノートに見る周到な準備のもとに物語世界を構築しつつ、作家は崩壊のドラマそのものに焦点を当てることはしませんでした。『白痴』には、典型的な模範家庭と、逆に崩壊家庭が対比的に描かれています。一方に、他も羨むエパンチン家があり、他方に、完全に崩壊しなかったイヴォルギン家があります。しかし、そのいずれの家庭も、さまざまな問題を抱えつつ、それ自体、ノーマルな家族構成を持っています。このような比喩が果たして可能かどうかかわからないのですが、正常なツリー状を描いている。いかに崩壊しかけていようと、まがりなりに

も家族的な配慮が行き届く空間が存在するのです。

しかし、『悪霊』において、決壊の兆しが現れました。家族の断片化と呼ぶこともできる状況です。すべてが、片割れの状態にあり、『白痴』における二つの家族が、まるで嘘のように、至る所に軋みとひび割れが入りはじめています。スタヴローギン將軍亡き後、スタヴローギン家にはステパン・ヴェルホヴェンスキーが居候として住みつき、女主人のワルワラ夫人は、農奴の娘ダーシャを養女に迎えました。スタヴローギンは、遺産の放棄を念頭に置きつつ、足の悪い妻のマリアにスイス・ウーリ州への移住を呼びかけます。そのマリアの兄レビヤートキンは、ひそかにスタヴローギン家の財産の略取を企てる恐るべき食客なのです。

思うに、これは、この二つの作品が書かれた背景と深いかわりがありました。じつは、二作品とも、ヨーロッパ滞在中に着想されているのです。つまり、現実にロシアの姿が見えない分、作品それ自体が抽象化ないし「観念」化される可能性を秘めていました。翻って、ロシアに帰国してから着手した最初の作品が『未成年』でした。しかも、彼は、『未成年』の執筆直前まで、保守派の週刊誌『市民』の編集に携わり、日々、ロシアの社会現象と向かいあっていました。ちなみにこの雑誌は、のちにアレクサンドル三世となるアレクサンドル大公の個人的出資によって発行されていた雑誌です。『市民』編集から離れたのちの最初の仕事だけあって、ドストエフスキーはさまざまな政治的な意思を意図せずにはいられません。同時に社会的な責務についても深く思考をめぐらさざるをえません。何よりもその膨大な「創作ノート」がこの小説が成立する状況の難しさを物語っています。『未成年』研究のパイオニア、A・ドリーニンは述べています。

「新しい考え、新しい気分がやって来た」（『ドストエフスキー最後の小説『未成年』と『カラマゾフの兄弟はいかに作られたか』）。

まさに、ロシア社会のひな形であるような小説、それが、ドストエフスキーの新たな目標でした。ロシア社会同様、小説もまた、家族構成、



人間関係の複雑さの点で、恐るべき混乱を示さざるをえません。一読してわかるように、ドストエフスキーは、過度に複雑な人物相関図を作成しています。なぜならそれこそが、同時代の貴族社会の「日常」であり、「現実」でもあったからです。そしてその現実を生んだのが、百五十年におよぶロシア近代化の歴史であり、農奴解放であり、端的には、貴族社会の精神的墮落だったのです。

2 境界線上に立つ『未成年』

『未成年』は、当初、『無神論』と題する小説として構想され、主人公の青年の精神的な変貌を綴る物語となるはずでした。一八六七年に妻のアンナとヨーロッパに出た際、ドストエフスキー『偉大な罪人の生涯』の構想に着手しますが、帰国後、この物語を、『子供達とヒーローたる子どもをめぐる長編小説』とし、その後改めて『偉大な罪人の生涯』のアイデアへと回帰しています。

ドストエフスキーの胸のうちにあったのは、トルストイの『戦争と平和』に対する対抗意識です。「命脈つきた地主文学」との公然たる戦いを彼は覚悟していました。まさに、『戦争と平和』のロストフ家に象徴される貴族たちの下に置かれた中間層そして下層の生息、それが彼の文学がめざす新たな対象となったのです。そこで基本とすべき物語世界は、トルストイの絢爛豪華な叙事詩的世界ではなく、真に悲劇的なドラマでした。ドストエフスキーの予感には、人間存在のより根源的な部分に及んでいたのです。すなわち、貴族階級の崩壊とともに、民衆（ナロード）もまた滅びるのか、民衆（ナロード）はこの危機をサバイバルできるのか。農奴解放後に訪れた社会の混乱を目の当たりにしつつ、彼は民衆（ナロード）の現実を見極めなくてはならなかった。

ドストエフスキーが、この小説に最初「無秩序（Geordynno）（воронко）」の名

前を与えたとき、当然のことながら、農奴解放がもたらした社会の混沌と家庭の崩壊がしっかりと視界にとらえられていました。そしてその混沌を、その生成状態において描くには、そしてそれが「命脈の尽きた地主文学」とならないためにも、従来にはない主人公像、そして新しい視点が必要となったのです。主人公は、まさにその渦のなかに、その中心に、言いかえれば、ありとあらゆる中間地点、そして境界線上立つ人間でなくてはなりません。「語り手」としての使命を果たすことはもちろんですが、世界の混沌を見つめるには複眼的な視点が不可欠だったからです。何よりも若者たちの世界を、まさにその動的感覚を伝えるためにも、感度のよい媒体たる人物の想像力、理解力、批判的精神が不可避でした。主人公が二十歳というのは、まさに、大人と子ども、父と子の境界線を意識した年齢設定だったと思います。

第二の境界線、それはほかでもありません、主人公アルカージーの出生に関わるものです。『未成年』が『未成年』として成立するゆえんは、二十歳の主人公アルカージーが農奴と貴族の血を分けて生まれたという状況設定に尽きるものです。この微妙なディテールこそは、物語を押し進める最大の力となりました。言い換えると彼は、二つの階級をまたいで生まれおちた私生児、つまり、貴族とナロードの境界線上に立つトリックスターの人間なのです。

さらに、もう一つ、境界線の問題があります。先ほども少し触れたイデオロギーの問題です。ドストエフスキーは、この小説に宗教小説と思想小説の二つの顔を与えました。小説全体が、この二つのテーマが互いにフーガの形式をなすかたちで構想されています。一般の読者は、それとは気づかないかもしれません。しかし当時の検閲官たちは、目を皿にしていたこの小説は、どういう思想、どういうイデオロギーをもつ小説なのか、と。

発表媒体が、ネクラソフ、シチュエドリンら左派系の要注意作家たちが



主宰する左翼系雑誌であれば、なおさらのことです。ドストエフスキーは、この小説が思想小説、とりわけ政治小説として見られることを恐れていました。と同時に、『祖国雜記』を拠点とする左派の大御所たちにもそれなりの配慮を示さなくてはなりませんでした。その動機が、まさに「二人の父」というテーマを呼び込むにいたった重要な契機だと私は思います。

思想小説としての特色は、主に、父ヴェルシーロフに対する批判として顕在化します。デラシネのごとき彼の、西欧派知識人としての身勝手なエゴイズムが、アルカージの厳しい糾弾の前で明らかにされていきます。第一部における父と子の息詰まる会話を読んでいくと、まさに、バフチンのいう「奪冠」の言葉さえ浮かんできます。しかし、他方、アルカージの法律上の父であり、ロシアを遍歴する聖痴愚マカール・ドルゴルーキーに対しても、けっして無条件に肯定的な態度をとっているわけではありません。ヴェルシーロフの口をおして、マカール老人のネガティブな側面が、やんわりとかつアイロニカルに提示されていきます。



「印の生神女」

す。まさに、ここは、同じバフチンの言う「多声的な」方法論が威力を發揮する場面です。

挫折した西欧派ヴェルシーロフと俗的な聖痴愚マカールをたくみに配置することで、そしてその双方にたいしアンビギュアスな態度を示すことで、作者ドストエフスキーは、『未成年』に寄せられるかもしれない批判を回避したということができるとは思います。

では、そもそも『未成年』は、宗教小説としてどのような成り立ちを持っていったのでしょうか。簡単に述べておきます。

第一には、この小説が、正教会の暦にしたがって構築されているという事実注目しなければなりません。ガリチエワの研究によると、『ドストエフスキーの小説『未成年』における個性の変容』、アルカージの、いわば自立の日ともいえるべき九月十九日は、父アンドレイ・ヴェルシーロフの守護神アンドレイ・ストラチラートの日にあたっています。また、ヴェルシーロフが、アルカージに黄金時代の夢を語って聞かせる十二月六日は、聖ニコラの追悼の日でもあります。

しかし、『未成年』が宗教小説としての特質をもつとも典型的に示す場面は、第二部終わり、アルカージが、放火の欲望に魅入られる十一月十五日、すなわち、精霊降誕祭の斎戒の始まりの日の記述です。『未成年』の草稿では、次のように書かれています。

「すべてに火を放て。街頭での夜、印の生神女の暗いかんばせ」

「印の生神女」とは、オラント型と呼ばれる、両手を掲げ、キリストを誕生を予告する図を描きこんだ聖像です。放火という破滅的願望の虜となったアルカージを救い上げるのが、第二部の「生神女」（聖母）に二重写しにされた母ソフィアの「かんばせ」であり、幼い日々耳にしたニコラ教会の鐘の音なのです。

これは、まだ推測の域を出ないのですが、ドストエフスキーには、それなりのしたたかな計算があったのではないかと思います。すなわち、第一部の段階では、できるだけ宗教色を抑え、雑誌の政治的傾向に反しな



い方向でプロットの流れを構築する。そして第二部から徐々に宗教色を強めていくという戦略です。先ほどの引用した放火事件とアルカージーの回心のモチーフが第二部に設定されていることも、そのあたりを裏付けてくれる根拠となりそうです。しかも、聖痴愚マカール・ドルゴルーキーに対する作家の視点も、第一部と第二部以降では、大きく変化していきます。ドストエフスキーはこうして徐々に、この小説を、『祖国雜記』の編集部の思惑とは裏腹に、右派イデオロギーに近づけていったと考えることができるのです。とりわけ西欧派ヴェルシーロフの「回心」は、『祖国雜記』と対立関係にある『ロシア報知』の編集者たちをも大いに満足させるものではなかったかと想像します。

「わたしはね、何としてもキリストを避けることができないんだ、最後に孤独になった人々の間に、キリストを想像しないではいられないんだ」〔未成年〕

3 「偶然の家族」——生き急ぐ子どもたち

主人公の名前は、アルカージー・ドルゴルーキー。年齢は二十。『未成年』は、貴族と農奴の「貴賤結婚」から生まれ、自立のためにロスチャイルドたらんと夢見るこの青年の成長のドラマです。小説は一人称手記のかたちをとっていますが、全体として、未成年の言葉のどこどころに、未熟さを印象づける言葉が挿しはさまれます。そこにも、ドストエフスキーの、「多声的原理」へのあくなきこだわりが垣間見られるようです。

家族関係からして異様です。地主貴族ヴェルシーロフは最初の妻に先立たれた後、持ち村で農奴の人妻ソフィアを誘惑し、物語の語り手であるアルカージーを、さらに、妹リーザを生ませます。ヴェルシーロフには、すでに亡き前妻ファナリオトワ夫人との間に二人の子どもをもう

けていました。

アルカージーは早くから親類に預けられ、その後寄宿学校に入れられることで、父母とは絶縁に近いかたちで成人にいたるまでの二十年を過ごしてきました。他方、ヴェルシーロフは、ロシア内外にあつて三つの財産を使い果たしながら、農奴マカールの妻ソフィアと暮らしてきました。十九世紀中葉のロシアにおいて、こうした事実を示される家族のドラマや倫理意識がどれほど規範からはみ出ていたか、わかりません。しかし、ドストエフスキーは、この家族の在り方に、一つのロシア的な悲劇の典型を見て、「偶然の家族」と呼んだのでした。

「偶然の家族」とは、人間、家族、社会を一つに結びつける普遍的な理念を失った父親の無思慮や怠惰のゆえに、子どもたちの運命がまさに偶然に委ねられている状態を言います。それこそは「無秩序」の世界なのであり、『未成年』の世界が描きだすのも、そうした「偶然」の生贄にする父たちの世代とその犠牲となる子たちの世代の闘いです。当然のことながら、そこで起こるのが、名前の混乱です。名前、父称、姓と家族のかたちが、てんでばらばらというのが、『未成年』における家族の実態なのです。私がここで、いわばその「無秩序」の一例として提示したいのが、ニコライ・ソコーリスキー公爵とセルゲイ・ソコーリスキー公爵の並置です。作者は、読者の迷惑などいっさい顧慮せず、あえてこのような複雑な命名を行ったと考えてよいでしょう。そこには作者の挑発的な意図すら感じないわけにはいきません。二つの公爵家の間に、血縁関係とよべるものはありませんが、両公爵ともにきわめて病的な精神性の持ち主である点は見逃せません。

しかし、危機ないし崩壊というテーマに照らして、何よりも衝撃的なのが、『未成年』に登場する子どもたちの運命です。ドストエフスキー時代の常識から見て、ヴェルシーロフ家に家庭の悲劇を認めることはできません。二十歳代以降、ヴェルシーロフがいかに放蕩息子を演じてきたにせよ、今は少なくとも安定していた状態にあることは疑いようがない



からです。ヴェルシーロフ家に精神的安定をもたらしているのは、いうまでもなく妻のソフィア存在です。

では、どこに、危機と崩壊の徴は隠されているのでしょうか。『未成年』の物語においては、まさに子どもたちの世代全般に危機と崩壊が襲いかかろうとしています。

第一部では、オーリヤの首つり自殺、第二部では、クラフトのピストル自殺が告げられます。第三部では、恐喝屋のランベルトとその一味がさまざまな暗躍ぶりを示し、放蕩と失意の末にセルゲイ・ソコーリスキー公爵がこの世を去ります。子どもたちに襲いかかった悲劇という点で、公爵との愛に挫折するリーザの名前を挙げることもできるでしょう。

社会の崩壊、家庭の喪失というテーマ的側面からもつとも悲劇的かつロマンティックな影を背負っているのが、最後に挙げたセルゲイ公爵です。彼には、かつて、アフマーコフ夫人の一人娘を妊娠させた過去があり、なおかつ、現にアルカージの妹リーザをも妊娠させています。アフマーコフ夫人にたいしてまで野心を抱き、リーザと結婚を約束しながらその義理の姉に結婚を申し込む。まさに、いつさいのタブー意識、善悪の判断が彼の脳裏から消失しているのです。彼の行動は、『悪霊』のスタヴローギンの影を追いかけているような印象すら与えます。ただ、それでも、セルゲイ公爵の破滅には救いがあります。正義と自己犠牲という観念の芽生えが最後に彼を訪れるのです。そして物語の終わりでは、ほぼすべての若い世代の人間が、カタルシスを得て物語の舞台から去っていきます。

アルカージの精神性の逞しさは、自己喪失に見舞われた子どもたちのなかでも群を抜いています。では、一人アルカージのみが、最近つとに語られるところのレジリエンズ、一種の耐性を持ち続けることのできた理由とは何なのでしょうか。

答えから先に言えば、まさに彼の混血性にあるといつてよいと思います。貴族の血とナロードの血。純血にたいする混血性の優位を説くのは、

若干、差別的であるとのそしりを受けるかもしれません。しかし、実際に物語を読み終えた読者の多くは、自らの出自に対する意識の屈折から生まれたアルカージの知的で、冷静で、情熱的かつ批判的精神の旺盛さ、共感力の力には圧倒されるにちがいありません。むしろその一部は、父親譲りの傲慢な知性の証と呼ぶこともできるものです。しかしその傲慢さも、すでに第一部の終わり、オーリヤの死によって新たな可能性ははらむこととなります。オーリヤの自殺に関わっていると自覚した彼は、内心で次のように呟きます。

「じつのところ、このほくこそが、ひよつとして火に油を注いだ張本人かもしれない。この考えはおそろしかつた、いまもおそろしい」

オーリヤの死は、アルカージの、怖いもの知らずの自己陶醉が、はじめて内発的な自己否定にさらされる場面でもあります。

4 一人称の問題——「失敗」か、成功か

さて、すでに述べたとおり、『未成年』に対する評価は、概ねこれを「失敗作」とみる向きが多いようです。ホルスト・ユルゲン・ゲーリクは、『批評家の大半は、ドストエフスキーの四大長編のことばかり語るか、ドストエフスキーの傑作を列挙する際に『未成年』にはまったく言及しない』（『進化するドストエフスキーの文学的意匠』）と書いています。ラーゲリ体験のあるすぐれた哲学者G・ポメラントもまた、これを「明らかな失敗作」（『深淵の眺望』）と呼んでおり、全面肯定の批評を見出すことは容易ではありません。

私見によれば、「失敗か、成功か」の問題は、一人称の選択に関わっています。すなわち、一人称を選択した時点で、「失敗作」と呼ばれるべく運命づけられたと、私は考えています。

では、そもそも第一人称、告白体を選ばれた背景にはどのような事情



があったのでしよう。『創作ノート』をのぞいてみましょう。

「一人称の語りのほうが、——より独創的でもあれば、愛もより多く含まれ、さらに芸術性ももっと多く要求される。それに配列もものすごく大胆で、もつと、短く、もつと容易になる。そして中心人物である未成年の性格がぐつと鮮明になり、それを掲げてこの小説の口火が切られる。その要因としての思想の意味が、さらに明瞭なものになる。しかしそのような独創性は読者をうんざりさせることにはならないだろうか。印刷全紙三十五台分に及ぶ一人称の語りを、読者は最後までがまんしてくれるだろうか？　そしてこれが一番大事なことなのだが、この長編の根本となるいくつかの思想が、——はたして、二十歳になったばかりの作者によって自然に、しかも完璧に表現されるものなのだろうか」（『ドストエフスキー全集』19A、小沼文彦訳）

予感的中しました。しかしドストエフスキーは、一人称スタイルの魅力にはじめから魅了されていました。『悪霊』におけるスタヴローギンの「告白」の成功が背後にあったからかもしれません（むろん、『ロシア通報』での連載の際に削除されたのですが……）。創作ノートを詳しく読んでいくと、逆に、三人称による語りが、「すでに陳腐化している」との理解が彼のうちにあったことを物語っています。彼がこのとき念頭に置いていた作家の一人は、いうまでもなくレフ・トルストイです。『祖国雜記』に『未成年』が連載されている間、ドストエフスキーのホームグラウンド『ロシア通報』では、トルストイの『アンナ・カレーニナ』の連載が始まっていたのです。

たしかに、作品全体が一つの「告白」のかたちをなしている以上、『未成年』は『悪霊』以上に、主人公＝作者の内面をダイレクトに表明できるチャンスを得たことができます。反面、そのように断定できない何かが、そのような断定をばむ何かが、『未成年』では生じました。理由は、作者と『未成年』という作品との距離の問題にあります。

ドストエフスキーは、『未成年』において徹底してプレーキをかけまし

た。実際、作家は、「一人称告白」を選んだ瞬間に、他者の内部にダイレクトに入り込む特権を失いました。

『悪霊』は、G氏というレポーターの取材記録のようなかたち（クロニクル）をとっています。彼は、あくまでレポーターであり、作者が使用している材料を自由に共有できる立場にありました。逆の言い方をすれば、作者は、ナレーターG氏の権利を随時侵犯しながら、作品の構造を極度に不安定化させていきました。それこそは、ナラティブ論から言えば、「失敗」の最たるものです。しかし、その「失敗＝侵犯」こそが、作品の魅力の源泉となったのです。

思うに、『白痴』や『悪霊』でおかしたいくつかの不備に対する反省意識が仇となって、『未成年』のもつ魅力が半減してしまったことは事実です。これはきわめて皮肉なことです。この問題は、『罪と罰』の人称を、最終段階で一人称から三人称に置き換えた事態と対称形をなすものと言つてよいでしょう。

作品が、一人称告白体で書かれることによって悩ましい立場に置かれたのが、だれであろう、父ヴェルシーロフです。どの登場人物にも、語りたい衝動があります。語りだすためには、自分を挑発してくれる存在がなければなりません。ヴェルシーロフは、辛うじて「黄金時代」の夢を語ることで済ませました。

ヴェルシーロフの内面の亀裂を、もつとも集中的に描き出すアフマーコフとの会見の場面は、主人公によって盗み聴きされたものです。『悪霊』では、ドキュメントのかたちで提示されたものが、『未成年』では、口頭での告白となりました。つまり、アルカージの饒舌のままで、登場人物の多くが沈黙を余儀なくされている印象を受けるのです。

では、この物語を、アルカージの物語として全面的にとらえることは可能なのでしょうか。いえ、可能ではありません。ドルグルーキーは、この『未成年』という小説のもつイデオロギー性の策略にからめとられた一登場人物にすぎないからです。アルカージはかぎりなく饒舌です

が、ドストエフスキーの思想の体現者としては、逆にむしろ寡黙すぎると思えるほどです。このような状況から考えて明らかになるのは、『未成年』という小説が、作者ドストエフスキーのミッシェンを受けた二人の人物の物語であり、その二人の補完的な関係性を通して『未成年』の「思想」は形作られているということです。「境界線」に立つ小説としての意味もそこにあります。

ただ、一つだけ注意しておかなくてはなりません。それは、この父子の関係性における均衡の欠如です。一つには、むしろ子アルカージーが語り手だという事情があります。しかし、もう一つ、要因があります。子にとって父は、少なくとも肉体的には、ひとりしか存在しませんが、父にとって子は、複数以上存在しえます。まさにこの均衡の破れが、この『未成年』の前提となっているのです。

父ヴェルシーロフは、永遠に父たるみずからの心情を、読者に伝えることができません。アルカージーの意識の檻に軟禁されている、という言い方も可能でしょう。父ヴェルシーロフとファナリオトワとの間に生まれた、二人の子どもの愛情関係も、むしろ読者にとっては遠い世界の出来事なのです。

この父と子の不均衡は、当然のことながら、アルカージーに、大きなフラストレーションと妄想を掻き立てることにになりました。疎外感が、マゾヒズムを誘発するのです。私生児という立場のみならず、その長い屈辱の意識によって培われた一種のマゾヒズムが彼の視界を曇らせています。しかし逆にこの視界の曇りが、彼に、人間的な再生のきっかけを与えらるるもいえるのです。

5 歴史層から『未成年』を見る

多くの批評家は、この小説に、一人の青年の人的成長を記録した「教

養小説」の趣を見ているますが、はたしてその見方はどこまで正しいのでしょうか。むしろ、『偉大な罪びとの生涯』という構想自体が、「教養小説」としての要素を備えていたと考えたほうが正しいと思います。ドストエフスキーは、たんに一青年の成長の軌跡をたどりたいたいと念じたわけではありません。それは、むしろ避けたい事態だったとも思えます。創作ノートをごらんください。

「もしも一人称の語りとするならば、すべての叙事詩は、つまるところ、自分はいかにして墮落しかけ、いかにして救われたか、という経緯に尽きてしまう」(同前)

では、『未成年』が、より社会的なメッセージを持ちえたとすれば、どのような点においてだったでしょうか。今日のお話の冒頭で、私は、『未成年』は、「ロシア社会と人間の現実に対する危機感とその将来に向けた希望の表明」だと申しました。『未成年』を読み終えられた読者は、この小説をとおして、一八七〇年代のロシアの「無秩序」を十分すぎるほど目の当たりにされたと思います。「無秩序」は、アルカージーの意識、ヴェルシーロフの人生に凝縮されています。

西欧を放浪し、ロシアを否定しつつもなおキリストへの思いを封じきれないヴェルシーロフとは、農奴制のもとで長く引き裂かれてきた古き良きロシア知識人の象徴です。いや、彼の知識人としての歩みこそは、混沌の歴史のなかに生きるもつとも誠実な生き方ということもできるのです。ロシアの貴族にとって放浪は、選択ではなく、宿命なのです。彼が、貴族として得た特権、三つの遺産を食いつぶすほどの放蕩は、ロシアの価値観からすれば、けつして許されないものではありません。ドストエフスキー自身の、すさまじい浪費癖、ルーレット癖を思いだしてください。いみじくもプロツキーが書いたように、金は、「地、水、火、風とならんで、第五の元素」(「元素の力」)であり、ユリー・ロトマンによれば、ロシア人にとってカード賭博は、これまた「不可避的な元素の一つ」(「ロシア貴族」)なのです。



しかし、すべてのドラマを生き終え、今や残骸のような姿をさらすヴェルシーロフにも、いずれ真の「復活」の 때가訪れてくることでしょう。ヴェルシーロフは、確実にキリスト教の精神にのつとつた新しい道に立つことができると思います。その道は、きつと『悪霊』のステパン・ヴェルホヴェンスキーのような、老いの恍惚のなかで閉じられるにちがいないりません。

では、将来に向けた希望とは、何なのでしょうか。

この問いに対する答えが、「エピソード」に記されています。アルカージーの「手記」を読み終わつたニコライ・セミョーノヴィチは、次のように書いています。

「ああ、私たちロシア人にとって何よりも大切なのは、それがいかなるものであれ、そう、みずからの、自分の秩序なのです！ ここにこそ、希望と、いかなれば思いが含まれるのです。たとえ、どのようなものでも、ともかくにも築き上げられた秩序が必要なのです。永遠につづく破壊、いたるところに飛び散つた木っ端、塵や芥だけはもうたくさんです。そんなものからは、すでに二百年、何ひとつ生まれはこなかったでしょう」(『未成年』第三部)

伝統を重んじ、秩序を重んじ、安静を求める、そこに救いの道があるとニコライは考えています。境界点に立つたロシアが真に歩むべき道は、「無秩序」ではなく、「秩序」です。ドストエフスキーは、「無秩序」(カオス)から立ち上がり、一つの「秩序」(コスモス)へ向かつて生成していく社会のプロセスを、まさに一人の青年の成長の軌跡として描き出そうとしていました。それは、まさに父的権力との対決・対話とおし、父の存在の肯定と否定とおして実現する「和解」の道です。

では、現実のロシアはどうだったのでしょうか。『未成年』が書かれた一八七〇年代のロシアはどんな状況にあったのでしょうか。ご存じのように、テロリズムの嵐の前夜です。

いまの時点で、二つの世代、二つの陣営の和解を、皇帝権力とニヒリ

ストが手を取りあう光景として直接的に描くことは不可能でした。考えられる道は、成熟した一個の大人と、成熟へと向かう一個の青年による、和解の物語です。いわば、和解のモデルケースの一つを、ドストエフスキーはここに提示してみせたのです。

『未成年』を執筆中の彼の耳に、ロシア各地で轟きはじめたテロリストたちの銃声が届かなかつたはずはありません。その銃声のこだまを耳にしながら、彼は、ロシアが、現実のロシアを支配する圧倒的な「無秩序」からひとつの「秩序」へと向かつて立ち上がっていく姿に思いを寄せていました。ヴェルシーロフはすでに過去の人です。求められるべきは、「未成年」自身の変容です。その「未成年」が、「貴族」と「農奴」の二つの血を引いていれば、来るべき「統合」のシンボルとしてなおのこと理想的です。しかしそのためには、やはり「秩序」と「平安」が不可欠なのです。アルカージー・ドルゴルーキーの名前に注目してください。その名に示されているのは、ほかでもありません、「地上のアルカディア」としてのロシアです。

アルカージーの肩には、若いニヒリストたちの運命がかかっています。アルカージーに倣え、ドストエフスキーの結論とはそのようなものだったと私には思えてなりません。

おわりに

最後に、一つだけ、ごく最近現れたラズーモフというドストエフスキー研究者の視点に注意しておきましょう(『ドストエフスキーの小説』未成年)における《偶然的家族》。「偶然的家族」とはほかでもない、アレクサンドル二世の家族そのものだという考えです。

農奴解放をなしたアレクサンドル二世は、きわめて性的に旺盛な皇帝であり、ヘッセン大公ルートヴィヒ二世の娘マリアとの間に、八人

の子どもをもうけました。しかし、マリアへの愛情はさめ、一八六六年に出会った没落貴族の娘エカテリーナ（愛称・カーチャ）と出会い、四人の子どもをもうけます。長年連れ添ったマリアは、肺結核の苦しみのなかにありました。そのマリアの苦しみを顧みることなく皇帝は、不倫に走ったのです。

この事実は、広く明るみに出て帝室内の批判を買っただけでなく、広く社会の話題ともなりました。注目すべき点は、いわば皇帝の不倫の相手が、ドルゴルーキー姓を名乗っていたことです。ラズーモフの新説によると、ドストエフスキーはこの事実を念頭に置いたうえで『未成年』の主人公にドルゴルーキーの姓を与えたと主張しています。真偽のほどはわからないのですが、その事実が、一部に憶測を生み、右派の友人の離反を招き、左派の思想家ミハイロフスキーらの賞賛を呼んだことが知られています。

『未成年』第一部に対する左派からの高い評価は、この小説のもつスキヤンダラスな話題が、広く皇帝権力への不満を浸透させるという左派の思惑と結びついていた可能性を示唆しています。経済的なひっ迫という事情を隠れ蓑に、あえて反対派の雑誌への寄稿を決意したとき、ドストエフスキーがそれなりの主題を用意しなければならぬと覚悟したことを想像するのは簡単です。そしてこの左派への接近が、ドストエフスキーの身辺に皇帝権力側からの嫌がらせとなって顕在化したこともまさに事実でした。

しかし、今、ここでその内実に深く立ち入ることは私の本意ではありません。私が注目したいのは、保守派内におけるドストエフスキーの威光が揺るぎないものとなり、逆にその人氣が帝政権力をも脅かすものとなっていたという事実です。当時、政府上層部にいたド・ヴォラン伯爵の予言を引用します。

「革命が起こったら、ドストエフスキーは大きな役割を演じるだろう」伯爵の予言が、どちらの陣営を念頭に置いていたかは、ここで述べる

までもないでしょう。

では、帝室の家庭を見つめるドストエフスキーとはどのようなものであったのでしょうか。結核を病むマリアを見捨て、若い「カーチャ」に走る皇帝の姿を、彼はどうとらえていたのでしょうか。

ラズーモフという研究者が書いています。

「ドストエフスキーは、全ロシアでただ一人、祖国ロシアの定期刊行物でおおやけに皇帝を批判できた人物であり、そうした一歩は、前例のない勇気が必要とした。その響きから、政治評論風の趣のあるエピソードにおいて、君主一家の崩壊こそは、現にロシアが置かれている無秩序と混沌の主たる原因の一つだということを公然と宣言すること、そのように書くことができたのは、おのれの祖国を熱烈に愛する人間だけであった」（『ドストエフスキーの『未成年』における《偶然の家族》）

ラズーモフの仮説が提示するのは、『未成年』が同時代において持った政治的な意味です。その読みは、ドストエフスキーの公的な発言に立脚するよりも、時代状況への鋭い想像力をよりどころとしている点で評価に値するものです。

ドストエフスキー文学の面白さは、何よりも、「二枚舌」の力です。「二枚舌」こそは、「多声性」の起源、というのが私の長年の主張ですが、「皇帝批判」とは、まさにこの「二枚舌」の真骨頂でもありました。

